

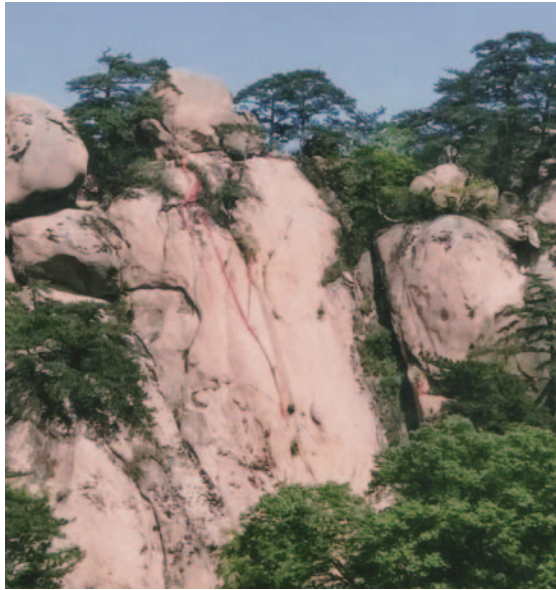
正門に到着した。9月号に写真を掲載したが堂々たる入り口である。中国のほとんどの観光地は、昨年行った鳳凰山もそうであったが巨大な門を造っている。まるで門自体が観光の対象になっているかのようだ。門の前方は、かなりのスペースが確保されていて観光バスが何台も停まっている。バスからはどこから来た団体か分からないが同じ色の帽子を被った人たちが降りて来る。

さて千山の最大の見どころは、「千山弥勒大仏」である。この大仏は、「大仏寺」の広い境内の一角にある。我々は軽く昼食を摂ったあと、大仏寺境内への入場券

と大仏寺そばから大仏が見えるところまで行くロープウェイの往復乗車券を買いに正門脇の観光案内所に行った。両方で一人130元(約2千円)支払った。正門そばから大仏寺山門まで行く観光専用車が出ると言うので、それに乗り込むと無料かと思うと一人10元取られる。どこの観光地も何でもかでもお金を取られる。車に乗ると数分で「大仏寺」と扁額の掛かっている山門に到着した。こんなに近いのなら歩けばよかった、と思ってももう遅い。山門から中に入るとそこには首に観光ガイドのプレートをかけた女性が数人いて、声をかけて来る。ガイド料は100元だと言う。私はどうせ話の内容がほとんどわからないので、要らないと言ったが友人たちは支払ったので仕方なく3分の1を負担した。

大仏寺はさすがに立派な構えの寺院であった。中でも三重の塔は、日本の三重の塔のように屋根のラインがすっきりしたものでなく、ごつごつし

た形であるが極めて印象的である。いまだに脳裏に焼き付いている。いくつかの建物をまわった後、我々とガイドは一緒にロープウェイに乗り込んだ。これもあつという間に着いてガイドの後に従った。



千山弥勒大仏の巨岩

坂道を少し登ると「南泉庵」の前に出た。それほど大きくないこの建物に大仏が安置されているのかと思い、中に入ったが小さな仏像や花が活けて有るだけで何も無い。どうしたことかと思わず不思議に思っていると、友人がガイドから聞いた話を通訳してくれた。「寺西さん、前面の大きなガラス越しに巨大な岩が見えますが、それが大仏だそうです!!」大仏

が岩であるとは夢にも思わなかった。

そうか! この庵は大仏を見るために造られたのか! 誰が考えたのか知らないがこの発想は面白い。説明を聞くと巨岩が頭部、胴体、腕や足に似ているのではないか。南泉庵と巨石の距離は、およそ300mである。それでも岩が巨大なので近くに見える。ネットで調べると、仏陀の背丈は70m、肩幅は46m、頭は9.9×11.8mと出ている。これらの岩塊を大仏と見定めたのは中国仏教協会長の趙朴初という人物である。自ら「千山弥勒大仏」と名付け、千山を東北地方の仏教聖地としたそうだ。この大仏は1993年に開眼供養している。

ちなみに「千山弥勒大仏」と四川省の樂山大仏(高さ71m)、そして香港の天壇大仏(高さ34m)が、「中国三大巨仏」というそうだ。何でも大きいものが好きな中国らしさが現れている。東大寺の大仏は高さが14.7m、鎌倉の大仏が13mであるから如何に大きいかわかるというものだ。



龍泉寺 80年前の写真とほぼ同じだった



朝早くから油条や豆乳スープを作っているおじさん

大仏寺を後にして、もう一つの有名な寺院に行くことにした。友人のMさんから以前頂いた資料に「龍泉寺」という名刹の80年前の写真があり、今も当時のままなのか確認したく友人にも写真を見せて是非行きたいと言ったのだ。場所は大仏寺のある山から遠くに眺める山の中腹にある。観光車に10元払いその寺院のある山の麓まで乗った。そこからまた石段だ。かなり上るとその寺院はあった。写真にある山々に抱かれるようにして建っている龍泉寺はほぼ当時の佇まいを残していて、見比べると感慨深いものがあった。ただこの寺院も観光客が多くおしゃべりの声ばかりが響き渡り、静かに拝観できる雰囲気ではないのでお賽銭を入

れ早々に退却した。999の山々にいくつかの寺院があるのかは分からないが、かなりの寺院があるらしい。「千山弥勒大仏」を中心として千山全体が祈りの山のように思えた。

正門まで戻りタクシーに乗ってホテルに向かう。今日は一日中山中を巡り歩いたので流石に疲れ、早めに休み明日に備えた。

旅の3日目、5月12日の朝が来た。今日中に大連まで戻らねばならないので朝6時にタクシーを手配してある。まず朝食を、となったがまだ5時なのでホテルのレストランは閉まったままだ。友人が外にお店が出ているはずだから、というので外に出ると果たして中年の夫婦が中国では定番の油条(揚げパン)や豆乳のスープを作っている。まだ朝は肌寒いので二人ともしっかりと着込んで作業している。5分くらい待つと出来上がったと言うので、油条(1.5元)とスープ(1.5元)にゆで卵(1元)を買う。これで4元(約64円)なので申し訳なく思いながらもおい

しくいただいた。油条に熱いスープで身も心も温かくなった。

タクシーはすでに到着していて早速乗り込む。これから行くところは、本溪にある「本溪水洞」という鍾乳洞である。鍾乳洞は日本では秋吉台や阿武隈洞などいくつか見てきたが、ここ東北地方で有名な鍾乳洞はどんなものだろうと想像した。鞍山から東に約100kmの地で、8時前に着いた。水洞の入場券の販売は8時半からのようなので付近の土産物店で時間を潰した後、窓口でカート乗車券(15元)と水洞入場券(120元)を求めた。多くの観光地は少し遠くに入場券売場を作り、現地までカートに乗って行くように設計しているかの



本溪水洞の入口

ように私には思える。3人ともこの地は初めてなのでカートに乗り込むと、案の定あつと言う間に水洞の入り口に着いたので少し騙された気分になる。

水洞は国家AAAAA級(5A) 旅游景区との説明版がある。そして「世界一長地下充水溶洞」と書かれている。「溶洞」とは鍾乳洞のことである。何でも世界一が好きなお国柄に閉口しつつもアンコウの口のようにポツカリと開いた入口に入る。するとそこには広い空間に広い水面が広がり何艘ものエンジン付きの船が係留されている。洞内は寒いので船の近くに置いてあるフード付きジャンパーを着用し船に乗り込むとまもなくエンジン音を軽やかに響かせながら水面をすべるように進んでいく。左右の天井は高く、石柱や石筍が奇妙な形で眺め

られる。七色の光が当てられ幻想的な世界が広がっていく。20人乗りくらいの船が何回もすれ違うのだ。かなり幅が広く水深もありそうな水路が続いていく様はさすがに素晴らしい。何でも世界一が好きだと悪態をついたが本当にそうかもしれないと思えてきた。何しろ右に左にカーブしながらなかなか折り返し点まで行きつかないのだ。奥行がどの位との説明はなかったが、1km近く進んだ感覚である。折り返し点に来て船は反転したが、まだその先は船が

行き交うほどの広さではなくなったが水路は続いていた。水洞と命名してあるが正に地底にできた大きな筒のようだ。流石に中国大陸は規模が大きいものだと実感した。

水洞の外に出て、入場券売り場まで歩き、そこにあるお店でカップラーメンを食べたが寒かっただけにとっても美味しくいただいた。帰りはどうするのかと思っていたら友達の一人がどうやらタクシーの運転手と話している。新幹線(動車)の本溪駅まで一人20円で交渉が成立したようで、知らないお客一人と一緒に無事本溪駅に着くことが出来た。動車の路線は、丹東駅経由でそこから海沿いに大連に行くルートで多少時間がかかったが、無事夕方には大連北駅に到着した。

(続く)